

はじめに

今回の表題で原稿テーマをいただいた。そこで、視点を「持続可能で真に豊かな暮らしを支えるために」、生活者のよりよい判断を支援する、信頼できる情報提供のあり方について考察する「こと」に置いて考えてみた。

このテーマ実現のためには、エネルギーの安定供給と適正価格化を果たしながら、生活環境を保全することが前提となる。生活者がそのことを、いっそう理解しやすいような情報を、いかに上手に提供できるかが課題となる。

これからの豊かな暮らしを維持発展させるために、大切なライフラインが不可欠であることは言うまでもない。エネルギーはそのライフラインと同義語である。

現代のエネルギー供給は、石油、天然ガス、石炭などの化石エネルギーが中心とな

生活者の賢いエネルギー利用を 支援する情報提供のあり方

森田 茂 *Written by Shigeru Morita*

っているが、これらを環境に優しいエネルギーに改質し、価格を適正に保てるか。その上で安定供給にはどうしたらよいのか。また、再生可能でクリーンな自然エネルギーのさらなる開発と普及をどうするか。いまや、これらを真剣に探求することが最も大事なことである。

エネルギー情報への関心度

ここで現在のエネルギーの使われ方をみると、エネルギーといえば、石油やガス、電気などがまず頭に浮かぶ。石油なら自動車のガソリンや軽油、家庭の暖房用の灯油など、ガスは厨房用の都市ガス、電気は照明、冷蔵庫、空調機器やパソコンの利用などに広く使われていることは誰でも知っている。

しかし、エネルギー資源に乏しい日本では、必要とする膨大なエネルギーの安定確保が国の死活問題に関係するが、エネルギー情報への認識に緊張感も持たずに、国民の関心は意外に低いのではなからうか。

言うまでもなく、電力の供給不安があれば、生活社会も混乱しかねないように、エネルギー問題は国民生活に決定的な影響力をもっている。また地球温暖化や異常気象の頻発する地球環境問題とも不可分の関係にあり、食糧生産や水資源のゆくえにも影響する要因を抱えていることを認識すれば、エネルギー情報への関心度はさらに高まると思う。

生活の中でのエネルギー認識を高める

いま日本人が消費しているエネルギーの量を石油に換算すると、一人一日10リットル(石油約200本、日本全体でみると、毎日東京ドーム一杯が消費されている)。

しかし実際には、例えば、東京デイズーランドに遊びに行けば、一人が一升ビン(約1.8リットル)のエネルギー(石油換算)を消費していることには気がつかない。また、東京・大阪間を移動するとき、一人当たり飛行機は新幹線の約七倍のエネルギーを使う。乗用車に一人乗りで行けば、ガソリンはさらに多量に消費される。夏に30度の気温が一度上がれば四三〇万キロワット(原子力発電所四基分の発電量)が必要になる。

また、本一冊作るのに、ほぼ一リットルの石油が必要である。さらに米一キロワットを作るのに牛乳ビン一本、セーター一枚に一五分分、靴下一足でも一本分のエネルギーを使っている。

例をあげたらきりがなく、われわれの生活は見えないところでエネルギーを支えられているわけで、見方を変えれば、膨大なエ

表 エネルギーと暮らし

(2010年想定 X MC=メガカロリー/年、石油=ℓ)

暮らしの項目	MC	石油換算(ℓ)	備考
暖房	5,713	606	・左表は平均4人家族の場合(高齢者住宅は多消費傾向あり) ・保温構造住宅は省エネ型 ・待機電力は約10%消費 ・太陽光発電は2490MC(264ℓ=石油換算) ・太陽熱温水器は998MC(212ℓ)
冷房	539	57	
照明	532	56	
電気機器	265	28	
洗濯機	31	3	
温水洗浄便座	112	12	
風呂など給湯用	4,500	478	
厨房用	972	103	
合計	12,664	1,343	

(石油1ℓ当たり天然ガスは約0.9m³-熱量換算 出所:資源エネルギー庁資料より計算)

ネルギーを消費しながら、その代償として現在の生活と環境の問題があるということになる。

このようにエネルギーは、生活、経済、環境などの深い関連性をもっている以上、エネルギー・環境問題は生活と密着していることを教える

エネルギー教育への情報の提供

したがって、これからの地球を担う子供たちに対するエネルギー教育や環境教育の重要性はきわめて高い。

いま日本のエネルギー・環境教育は総論の傾向が強いが、欧米先進国のように各論まで踏み込んだ学校教育が求められよう。二酸化炭素を排出しないクリーンエネルギーの確保を国民全体で真剣に考えるべき時に、中・高等学校は「エネルギーと環境」に関する新しい教科や科目を他の科目と関連付けるクロス・カリキュラムを作って、幅の広い学習指導を行ってほしい。大入試での出題頻度を増やすなどの対応が採れば、エネルギー・環境教育が再評価されるに違いない。

卒業後は、これらに関連する各種の免許や資格を取得して、専門家として各界で活躍し、国際エネルギー機関などの業務に携わる人などが、ますます必要にされようとしている。学生時代の知識や社会人としての資格は、大人になってその意識改革を強めるきっかけになり、

国民的な関心を高める要因になり得るだろう。それゆえに、エネルギー関連の教育に役立つ情報の提供は必須と言える。

生涯学習としての情報の提供

言つまでもなく、エネルギー・環境情報は古くて新しい問題である。われわれのいまの生活は、四〇数億年かけて作られ蓄えられてきたエネルギー資源などを利用して成り立っている。したがってエネルギーの歴史を知り、そして受け身の学習から主体的な思考力を養うことが大事になる。

エネルギー・環境問題を考える上で、社会の血液とも言えるエネルギーとは何かという、最も基本的な知識を習得する必要がある。さらに、エネルギーの利用を正しくコントロールすることや、その再生の技術などを子孫にどう伝えるかを学ばなければならぬ。民生分野でもエコタウンやエコライフを創り出すことなどが高く評価されようとしているが、これらの問題を現実的な課題として考えることは生涯学習にふさわしいのではなからうか。

いまの大人たちの責務は、現在の子供や孫たちの世代も、現在以上の充実した生活が共有できるように配慮して、エネルギー資源や技術を残してやることであろう。そのために生涯学習としての情報を提供したい。

現代人の教養としての情報

先のオイルショックを経験した人は、エネルギー情報に敏感になっているが、一般的にはまだ関心が薄いとも言えよう。したがって、前述のような生涯学習的な情報の提供が必要と考えている。

国民生活にとつても、経済活動にとつても、エネルギー問題は空気と水のように不可欠なものであるから、良質なエネルギーをいかに安定的に確保するかは国民の最大関心事と言っても過言ではない。身近な省エネルギー問題から、原子力、クリーンな自然エネルギーの供給や環境問題まで広範囲な課題に関心をもち、ことは教育的な必須事項と言える。

グローバルなIT社会では、エネルギーのメルマガも発信されているが、誰もが避けては通れない内容を解説し、その有効性を常に確認している。

文化の違う人たちとの対話に、広範な分野のエネルギーや環境に関する教養はますます役立つに違いないし、石油、石炭、天然ガス、原子力や新エネルギーなどのエネルギー源の功罪をよく理解し、どういったエネルギーバランスが、平和で豊かな生活にふさわしいかを提言しようではないか。

エネルギー資源を大切に、合理的に使うことは生活向上への道につながるので、Eco時代の新しい教養とも言えよう。

あとがき

エネルギー情報の提供を考えるとき、カスタマーの認識レベルを高めることが前提条件になるだろう。そのための教育や生涯学習の必要性を理解してもらいたいと考えている。

いまや少子高齢化社会となり、冷暖房の利用や福祉産業の拡大など、高齢者の生活はエネルギー多消費型になるから、なおさらに、このエネルギー問題を度外視するわけにはいかない。また情報化社会には電気や光エネルギーが不可欠であるから、これからはますます関心を払わねばならない環境下で生活しているとも言える。

このように、生活に密着した学習としてエネルギー・環境情報を捉え、理解しやすい言葉でそれを提供することが必要であろう。

以上、この拙文が少しでもお役に立つことができれば望外の喜びである。

■ 森田 茂(もりた・しげる)

森田総研事務所代表、エネルギー・アナリスト。一九三〇年群馬県出身。五五年東京外国語大学卒業。出光オーストラリア社長などを歴任し現職。著書は、『英語笑話の外交』(秀和)、『私色のことわざ』(秀和)、『六〇歳からの知的生活』(共著、日本実業出版社)など。